



Title	序
Author(s)	原田, 聖二
Citation	関西大学経済論集, 36(2-4)
Issue Date	1986-11-04
URL	http://hdl.handle.net/10112/14710
Rights	
Type	Others
Textversion	publisher

序

本年をもって、わが関西大学は100周年を迎える。30年前に創立70周年記念特輯が刊行されて以来、10年を節目として記念特輯を発刊して来たが、今回も100年という、まさに意義深い節目を迎えるにあたり、経済学部のスタッフによる記念論文集として『経済論集』の特輯号を編集・発行することとなった。いかなる華やかな行事よりも大学にふさわしい企画であるとして喜びたい。

そもそも『経済論集』は、その創刊を昭和25年11月にたどることができるが、それ以前すでに昭和4年に経済学会そのものは設立されており、昭和53年には『関西大学経済学会創設50周年記念論集』が刊行されている。ここに、関西大学100周年という輝かしい歴史の中で、経済学部・経済学会の活動をふりかえるとき、改めて諸先輩の熱意あふれた研究活動の積み重ねとたゆまぬ努力に思いをいたし、深甚の敬意を表わさなければならない。そして、こうした遺産を継承しながら、関西大学と経済学部の限りない発展とさらなる充実をすすめるべき責任と使命の重大さに身のひきしまる思いがする。

関西大学の創立以来、「汎く内外の法律及び経済学を教授する」として経済学が、法律とともに本学の重要科目として講じられて来た。そして100年、経済学部においては「汎く内外の経済学を教授する」数十種の専門科目の講義が行いうるようになった。そして、それらを通じて経済学部の特徴であるバランスのとれた教育が行われており、それを担うにふさわしい専任の教員を擁し、相互に絶えず切磋琢磨しつつ研究活動を続け研鑽を重ねるといった環境が整備されている。

すなわち、経済学会はその発足時から、いや経済学会の創設そのものが研究活動の確保の場として位置づけられ、研究会の積み重ねの上に成立したものであるから、その原点に立って、われわれは研究活動を活発に行わなければならない

ないであろう。そのために、夏期研究会、定例研究会などを含めて最善の努力情勢の激変に応じた研究体制を確立すを払って来たが、昭和60年に最近の社会の必要を痛感し、夏期研究会を一層発展させた形で、装いも新たに「研究大会」として第1回を開催し、昭和61年には「第2回研究大会」をもったが、いずれも大盛況を極め活発な議論が展開された。ここに新しい経済学会の研究体制の地平が開かれたのであった。かかる新しい研究体制の確立と諸先輩の築き上げた遺産とが相まって研究成果として実を結びつつあり、経済学の進展によって到達した精緻な体系と豊富な内容に加えて、経済社会の要請にも応えうる学問的成果の一端が本記念論文集に伝えられている筈である。

昭和61年11月4日

關西大學經濟學部長

原 田 聖 二